



ゲート SEASON2

自衛隊 彼の海にて、斯く戦えり

5. 回天編〈下〉

α L P H α L I G H T

柳内たくみ

Takumi Yanai

アルファライト文庫



主な登場人物

Main Characters



シャムロック・ハ・エリクシール

ティナエ政府
最高意思決定機関
『十人委員会』のメンバー。



メイベル・フォーン

亜神ロウリィとの戦いに敗れ、
神に見捨てられた亜神。
徳島達と行動を共にする。



徳島 甫
とくしま はじめ

海上自衛隊二等海曹。
特務艇『はしだて』への配属
経験もある給養員(料理人)。



伊丹 耀司
いたみ ようじ

陸上自衛隊一等陸尉。
江田島の要請を受け
再び特地へ赴く。



石原 莞吾
いしはら かんご

中華人民共和国・
人民解放軍総参謀部二部に
雇われた日本人。



オデット・ゼ・
ネヴュラ

アライ種の少女。
戦艦オデット号の船守り。
プリメーラの親友。



江田島 五郎
えだじま ごろう

海上自衛隊一等海佐。
情報業務群・特地担当統括官。
生粋の“艦”マニア。

その他の登場人物

レディ・フレ・バグ 海に浮かぶ国アトランティアの女王。
セスラ メトセラ号の三美姫。三つ目のレノン種。
イスラ・デ・ピノス シャムロックの秘書。
北条宗祇 北条元総理の息子。若手政治家。
カイピリーニャ・エム・ロイテル ティナエ艦「エイレーン号」艦長。
ドラケ・ド・モヒート アヴィオン海海賊七頭目の一人。
オディール・ゼ・ネヴュラ 漆黒の翼を持つアライ種の少女。



シュラ・ノ・
アーチャー

帆船アーチ号船長。
正義の海賊アーチャー族。
プリメーラの親友。



プリメーラ・ルナ・
アヴィオン

ティナエ統領の娘。
極度の人見知りだが酒を飲む
と気丈になる『酔姫』。

特地アルヌス周辺

●ロンデル

帝都●

●イタリカ

◎アルヌス

碧海

グラス半島

エルベ藩王国

トユマレン

クンドラン海

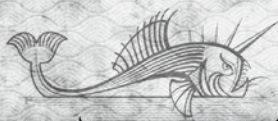
●カナデーラ諸島

●メギド

アトランティア・ウルース

アヴィオン海

碧海



08

中華人民共和国／人民解放軍総参謀部

人民解放軍総参謀長の剛起平^{ごうきへい}は、陸軍士官の時代にはあまり意識することなく見ていた地図を眺めつつ、自国の置かれた状況を改めて考えていた。

中華の歴史の中で生まれ滅んでいった国々は、地政学的にいう大陸国として振る舞った。

辺境の騎馬民族や蛮族の絶え間ない襲撃と略奪から中原^{ちゅうげん}と人民を守るため、長城を建設してその内側を安全地帯とすることで繁栄してきたのだ。

長い長い歴史の中で、それらの国々は国力、あるいは周辺国との関係において征旅^{せいりょ}を発することもあったが、軍の役目はもっぱら防衛であり、あるいは皇帝の支配を支えるため内側に対してその力を向けた。故に軍といえば陸軍のことを指していたのである。そのことは共産党が中華の地を制し、党の指導に従う国家が建設された今も変わって



いない。

人民解放軍は、読んで字のごとく「人民を解放する」ために存在する。

モンゴルで、チベットで、ウイグルで、そして中原で、人民を、政府を、資本家やファシストの悪逆な支配から解き放ち、唯一無二にして善良かつ有能な政策立案機関である共産党の指導下に置く。それこそが「解放」。それこそが人民にとつての「幸福」なのだ。そして、それを力づくで実現することが、人民解放軍の使命なのである。

だが時代は変わり、「中華は霞む地平の果てまで広がり、その向こうに化外の民が住まう四夷がある」という時代は終焉した。地球の真裏まで情報が瞬く間に行き交うようになり、物流は大陸の縁から溢れ落ちるように海を経て、全世界のあらゆる所まで行き届く。

ここまで世界の繋がりが密接になれば、中華中原はおろか、ユーラシア大陸ですら、巨大な海に浮かぶ島でしかないと思ひ知るのだ。

極東アジアを中心に、南東の方角を上に向けた地図を眺めてみる。

すると、中華人民共和国の絶望的な状況が見えてくる。

中華は、外洋へと出て行くルートのごとくが塞がれているのだ。

まず、南シナ海に面した右方向（南西）。南シナ海からマラッカ海峡、あるいはロン

ボク海峡を経てインド洋、中東へと向かうこのルートは、石油の輸入のためになくてはならない。

しかしこれはマレーシア、インドネシア、シンガポール、そしてインドによっていつ塞がれてもおかしくない状況だ。

一方、太平洋側、この地図で上方向（南東）に向かって進む道もまた、沖縄、台湾、フィリピンが作る島々の連なりによって阻まれている。

左方向（北東）に向かって進めば、日本海、ベーリング海を経て地球温暖化によって使用が可能となった北極海経由ルートが広がっている。

だが、ここもまた朝鮮半島、そして日本の対馬の隙間を通らねばならないし、津軽海峡あるいは宗谷海峡を抜けなくてはならない。

そう。どの海に向かうにも中華人民共和国の前には道を塞ぐ関門が存在しているのだ。通常の国ならば、そんなことはあまり問題視しない。それら関門を持つ国々との友好関係を築けば、往來に支障は生じないのだから。しかし、偉大なる中華の復興を目指している今、友誼や好意などといったあやふやなものに頼ることは許されない。自国の生命線を他人に委ねて機嫌を損なわぬよう振る舞わなくてはならないのは屈辱だし、それでは繁栄だって覚束ない。それらルートの要衝は、「解放」されなくてはならないのだ。

そういう意味で、対日本において重視すべき海峡は、三力所ある。

まずは津軽・宗谷の二海峡。こちらは北海道を手中に収めれば確保できる。

もう一つが太平洋への道——宮古海峡だ。ここを獲得するには、沖縄を手に入れる必要がある。

そのため中国政府は、共産党の指導下で硬軟二つの作戦を展開している。それは「蛙は熱湯に放り込まれたら逃げ出すが、水から煮ていけば茹で上がる」という計略を基にしたものだ。

まず該当する地域に自国民を移民させる。

土地私有制を持つ日本で、彼らに土地を取得させる。そしてそこに、華僑の、華僑による、華僑のための租界そかいを築いていくのである。

その後は、日本国籍を取った華僑の代言人となる国会議員を増やすか、あるいは人権を盾に在留外国人に対する参政権を認めさせる。そして彼らに独立運動を起こさせ、それを保護支援すると称して、軍事介入に打って出るのである。

これは実際にロシアが南オセチアやクリミア半島を奪い取るために行った手法でもある。軍事介入した後は、彼らを独立させて併合するもよし、独立を維持させたまま属国として扱ってもよいのだ。

対して尖閣せんかくにおいては、力で緊張状態を作り出すやり方を探っていた。

尖閣諸島の領有権を主張し、常に緊張している状態を維持するために、島の周囲に中国の公船を浮かべている。日夜、寝ても覚めても絶えず送り込み続ける。互いが睨み合っていることを常態化させるのだ。

これには、北海道や沖縄で展開している作戦から耳目を逸らす陽動という意味合いもあるが、日本人の警戒心を麻痺させることが目的だ。

そうした緊張状態を作った上で、日本国民に対して「中国はそう悪い国ではない」「アメリカと手を結ぶほうが売国」「人の住まない島を、一個や二個取られたくらいでいきり立つ必要はない」と、影響力の大きな者——特にマスコミや文化人を通じて呼びかける。緊張状態も常のものとなれば、やがて人々の意識から消えていく。そうしておいて、軍事行動を起こす好機の到来を待つのである。

好機とは、軍事行動を起こしても日本が奪い返してこれないくらいに弱った瞬間だ。災害や政変、混乱などで政府の機能が低下した時、国際情勢で全世界の目が別の方面に向いている時などが狙い目となる。いずれ日本列島では、必ず首都圏で大規模な災害が発生するはず。その時をじっと待てばいい。

しかし、その好機を待たずして実力行使に出るとなると、話は違ってくる。力づくに

対しては、力ずくの抵抗が起こってしまうからだ。

剛としては、それだけは避けたかった。いくら日本が尖閣の要塞化などという不埒な企てを目論んでいたとはいっても、武力行使で対抗しては、これまで整えてきた様々な準備がご破算になってしまう。その一点が心配の種なのだ。

「総参謀長閣下、お時間です」

海軍司令員の魏中將^ぎが言った。

振り返って魏海軍中將の顔を見ると、剛は複雑な心境になった。

今回の作戦で尖閣還収に成功したら、次代の総参謀長の座は勝利の栄光と功績を手にした海軍とその司令員の魏中將に決まる。にもかかわらず剛は、自分をこの総参謀長の座から追い落とすことになる作戦を成功させなくてはならないのだ。

「状況は？」

「依然として、変わっていません」

東シナ海では、日本政府への抗議を旗印にした活動家グループに偽装させた海上民兵が、尖閣の接続水域に到達していた。

それ以上進むのを阻もうと、日本の海上保安庁、そして海上自衛隊が待ち構えている。当然、剛も海上警察と人民解放海軍を現場に送り込むよう命じていた。

東シナ海上空は、既に両国所属の戦闘機が飛び交って盛んに牽制^{けんせい}し合っている。

文字通り、一触即発の状態だ。それでもまだ戦火を交えていないのは、互いに「先に手を出した」という罪を背負わされるのを避けたいがためだ。

「そうか……ここまで来ても、日本政府は譲る様子を見せないか」

すると、魏海軍中將は同情含みに笑った。

「ある意味予想通りといえます。日本にも、毛虫ほどのプライドがあるでしょうから、戦わずに退くことは出来ないでしょう。彼らが退きやすいよう、盛大に打ち負かしてやりましょう」

「……そうだな」

とはいえ剛は内心、力ずくの作戦には反対の立場であった。

もちろん、負けるなどとは思っていない。兵器の質はまだしも、量においては中国は圧倒的に優勢なのだ。だがそれでも、万が一というのがある。アメリカがどう出てくるか分からないというもある。軍事をよく知る者ほど、軍事力の使用には慎重となるものなのだ。

だが海軍は勝てるという。ならばやらせてみる、というのが臺^{どう}国家主席の意思でもあった。

「問題は、日本がどこまでやるつもりかだ」

その辺りが、なかなか判断が難しいところである。

「相手の都合など考える必要はありません。奴らが悲鳴を上げて、もうやめてくれと叫ぶまで、我々は進めばよいのです。そもそも、資源の安定供給をして欲しければ友好関係を維持するようにしろ、と上から目線で告げてくるところが身の程知らずで傲慢です。我が国との関係を良好に保ちたいなら、我々が求める全てに是と服従し、代わりに恩恵として利益と安全を与えて欲しいと伏して乞うべきでしょう」

「とはいえ、島を失っただけで、日本が我が国に屈服するか？」

「するでしょう。魚釣島の次は、いよいよ沖縄です。糧道を断たれるとなれば、日本として屈服するしかありません」

魏海軍中將は簡単に言った。

しかし剛総参謀長は、そんなことあるはずがないと思っていた。

これまで何のために日本が、太平洋にメタンハイドレートが存在することを報道してきたか。いざ、中東からの輸入ルートが断たれても、日本がそのまま倒れてしまうことはないぞと、内外に、特に中国に対してアピールするための。

「しかも日本には特地がある」

「今日明日で、これまでと同じ量の輸出入を確保できる訳ではありません。報告によれば、特地内でもいろいろと騒動が起きているそうですから。我が国の優秀な工員が現地で活躍しているという報告も、葉補佐官からあったではありませんか？」

「ふむ。その通りだな」

とはいえ、日本が素直に引き下がるはずはない。米国とともに中国を侵略国と非難し、あらゆる次元で反発してくるだろう。そして、そうだった時の日本には、これまでのような制限はない。

例えば、北朝鮮の日本人拉致が明らかになった時のこと。

あの出来事をきっかけに、日本人は一斉に右傾化したと言われている。親北朝鮮の立場をとってきた言論人の多くは、それまで「拉致などない」「拉致など、北朝鮮を貶める謀略的宣伝工作に過ぎない」と言い張ってきた。しかし実際に拉致があったと判明すると、声望と発言権を失った。以後日本は、何かの頸木を取り払われたかのごとく、北朝鮮を明確に敵視するようになったのだ。今では北朝鮮の絡んだ交渉では、あらゆる場面で頑なに振る舞い、ほんの僅かな譲歩すらしなくなった。

それが今度は中国の番となるのだ。

島を奪えば、日本政府を押さえ込んでいた頸木がなくなる。領土を奪われたからには、

平和憲法で国は守れないと叫び「憲法改正」というカードが切れる。日本国内にある中国人資産の凍結や没収とであり得る。

これに反対する者は極少数派に転落するだろう。外国人参政権など、言葉の端に乗せただけでも売国奴と罵られる状況に陥る。そうなつては、北海道、沖縄を奪い取ること也不可能だ。せつかく長い年月をかけて準備してきたのに、それらが全てダメになってしまうのだ。

専守防衛という鎖が外れた日本は、領土が奪われている限り戦争状態は続いていると宣言し、中国にダメージを与える手法を行ってすることも予想される。

その一つとして、地味にキツイのが通商破壊だ。

といっても、第一次・二次大戦時のドイツがごとく、潜水艦でタンカーを沈めて回る必要はない。海上交通の要衝——例えばマラッカ海峡、ロンボク海峡、そして宮古海峡等に、機雷を散布すればよい。

機雷処理は、日本のお家芸だ。第二次大戦、朝鮮戦争、湾岸戦争と、機雷処理の経験をこれ以上ないほど積んでいる。そして処理が得意ということは、裏を返せば、どう仕掛けたら嫌がらせになるかを承知しているということにもなる。

特に近年の機雷は性能もよいので、特定の船にだけ反応する、あるいはしないように

することも可能だ。そうなったら中国は、原油の輸入を断たれて、たちまち干上がってしまう。

ロシアがクリミア半島をウクライナから奪い取り、欧米各国から懲罰を受けても平気な顔をしていられるのは、資源輸出国であるという面に加え、国民に窮乏に耐えることが出来る強さがあるからだ。

しかし中国にはその強みがない。経済が驚異的に発展していく中で、強権的な一党独裁制により国民の不満を封じ込めてきたのだ。国民に耐乏を求めるのはまったく不可能だろう。

すると、これまで強みとしていた十三億という人口が、足枷に転じる。十三億人が要求する食糧、資源、そしてエネルギーをどうやって確保するか。

今日、中国が一路政策で、経済的紐帯（きんたい）をユーラシアの内陸に向けて広げようとしているのも、いわば糧道を断たれることを防ぐためだ。しかしそれは未完成なのである。

だからこそ我が国は、これまでも台湾や尖閣を武力で奪うという行動を取らなかった。なのに海軍は、あえて武力行動を起こすという。

剛は、魏中将の見識を問うために尋ねた。

「私は、尖閣を奪い取るのはまだ早いと思っている。準備は整っていないとね。君は強硬手段に出た後の影響を検討しているかね？」

「それは大した問題ではありません。時間はかかるでしょうが、平和と友好関係という美名を鼻薬として嗅がせながら交渉を重ねていけば、いずれどうとでもなりましょう」

「では、台湾はどう対処してくると思う？ ロシアは？ インドは？ ヨーロッパの各国はどのような態度になる？ 次から次へと、我々が対処しなければならぬ戦線はどんどん拡大するぞ。カシミールやブータン方面はどうなっていく？」

すると、魏海軍中将は答えた。

「心配の必要はありません。インド軍がガルワン渓谷で戦力を増強しているという動きがありますが、陸軍が余計なことをせずに隙を見せねば、それ以上動くことはありません。インド兵相手に派手な殴り合いをして死者まで出してしまいうから、係争地から撤退しなければならなくなるのです。おっと、これは別に陸軍を批判している訳ではありませんよ」

「では、我が国内に目を転じてみよう。君の目には国内情勢はどう映っている？」

「確かにウイグル、チベット、そして香港では不穏な状況が続いています。しかし抑えることは簡単です。総参謀長、我々は困難を理由に怯むべきではありません。断固とし

て戦って、力を示すべきなのです。繰り返しになりますが、ここで退いては将来に禍根を残します。剛上將はやたら慎重論を口にされますが、我々海軍が戦果を上げることに嫉妬なさっているではありませんか？ だから我々を掣肘を加えるようなことを仰るのです」

魏海軍中将は、内心の優越感をあからさまにして語った。

確かに年々拡大を見せる海軍への嫉妬心がないとは言わない。だがそれだけではないのだ。

剛には、魏の言葉から早く早くという焦りの匂いしか感じられない。後でどんなに状況が酷くなるうとも、とりあえず今、自分が勝利を得られればよい。そういう魏海軍中将の自分勝手な成功と勝利への渴望が、状況判断を見誤らせているとしか思えないのである。

*

*

その頃、日本――

時は、多くの人が昼食を取ろうという頃であった。

毎朝新聞社会部記者の鶴橋^{つるはし}は、首相官邸から少し離れたところにある六本木の高級レストランメゾンにいた。周囲のテーブルは、二人ないし三人連れの客がテーブルを囲んで、静かに談笑しつつ料理を楽しんでいた。

こんな店を鶴橋が利用するのは初めてで、いつものよれよれなスーツ姿で来たことを大いに後悔していた。にもかかわらず、案内されたテーブルは、フロアのほぼ中央。景色の良い窓際ほどではないけれどなかなかよい扱いだ。予約の際に告げた毎朝新聞社の名が、功を奏したに違いない。

だが、鶴橋の向かい側に座るべき相手はまだ現れていない。

「早く来てくれないかな……」

高級店にいるというだけで何だか据わりの悪さを感じるのに、中央のテーブル席で食事もせずに一人で待っているというのは、途轍^{とてつ}もなく居心地が悪いのだ。

「いや、待たせてすまん。仕事がなかなか終わらなくて」

だが、鶴橋のそんな気苦労が最高潮に達した時、待ち人が現れた。

親譲りの端整で爽やかな笑顔と、流暢な弁舌。その顔も名前も、テレビによく映る若手の政治家として人々に知られている。実際、この男の登場に、店内は一瞬静まりかえった。皆がこの男の名をひそひそと囁いた。

「ほうじょうそうぎ
北条宗祇よ」

「北条元総理の息子だ」

衆議院議員にして、内閣府大臣政務官の北条宗祇。その姿を見た途端、鶴橋の口から喉元までこみ上げていた文句よりも先に安堵の溜息が出た。

「仕方ない。スケジュール通りという訳にはいかない忙しい身の上なんだろう？」

「ああ。だがこの店には、以前から一度来てみたかったんだ。だから誘ってもらえて嬉しい」

北条宗祇は、ギャルソンのアテンドで腰を下ろすと微笑した。

「今日は日曜だが、この後も政務がある。だからノンアルコールでいきたい。とはいえ気分だけでも呑^のんだつもりになりたいから……」

北条宗祇は、さらっとリストの下にあるものを指差す。1688グラン・ブラン。それはノンアルコールのスパークリングワインだが、名前からして高級そうな雰囲気がある。鶴橋はその金額を思っ、思わずどぎまぎとしてしまった。

「何年ぶりになる？」

「北条が選挙に出る寸前だったから、もう五年か？」

美味い食事のおかげか、二人の会話は滑りよく始まった。

「もうそんなになるのか？ 忙しい毎日の中にとると、随分と速く感じるよ」

「おいおい、何年も前のことをつい昨日のように言ってしまうのは老化が進んだ証拠だぞ。ちなみに俺が久しぶりという感じがしないのは、北条の姿を新聞やテレビで日常的に見ていたからだ。随分とご活躍のようで何よりだ」

「これでも三年生議員だからな」

三年生議員とは三年目という意味ではない。選挙の洗礼を三回受けているという意味だ。

衆議院は一期四年だが、途中で解散があるし、北条宗祇の場合、最初の当選は補欠選挙だったから、僅か五年のキャリアでも三回の選挙を経験することが出来た。様々な役職を担うことが要求されるのも、概ねこの頃からだ。

「でも、政務官なんて凄い」

「親の七光りさ」

「七光りだけじゃ政務官にはなれんだろ？ 次は副大臣か大臣という噂も聞こえるぞ」すると北条はちよつと自慢げに鼻を高く上げた。

「まあ重要な仕事をいくつかこなしたからな。特地の海賊対処法だって俺が担当した。

おかげで総理や党幹部の覚えもめでたくてね。で、お前のほうはどうなんだ？」

「社会部で十一年目。まあまあ普通にやってる」

「政治部に移って、官邸詰めになればいいのに」

そうすれば、政務官とも日常的に接することが出来る。何ならネタを流してやるよ、とも言った。しかし鶴橋は笑って後ろ頭を掻いた。

「そういうのは、俺には無理そうだ……」

「確かに。貴様はそういうのは不得手そうだ」

政治部の記者は、政治家とズブズブの関係になりやすい。

日常的に情報を貰う代わりに、潰したい人事や法案のリーク、あるいは政敵にとって不利益な飛ばし記事を書くといったことを引き受けなければならない。つまり「政治工作」の道具になるのだ。

とはいえ、政治記者はそういう関係を利用し、時に利用されるからこそ、政界内部のことを記事にすることも出来るのだ。なのにこの男は、仕事に個人的な関係を持ち込みたくない頑なだ。

「そんな貴様がわざわざ俺を呼び出すなんて、どういった風の吹き回しだ？ 特地の問題ならいくつか話してやれることがあるぞ」

「どんな？」

「特地のカナデーラ諸島が、国家を自称する海賊集団に占領されたのは知ってるな？」

「ああ。尖閣の問題ですっかり埋もれてしまっているがな」

「我が国は『治安出動』を命じた。ここに来るのが遅れたのも、実はその処理をしているからだ」

「治安出動？ 防衛出動ではなくてか？」

「あくまでも海賊という治安を乱す者への対処だからな」

「そっか。それはそれで面白そうな話だが——出来ることなら一番ホットな問題を教えてくれ」

鶴橋は言いながら、手帳を取り出した。

「何を知りたい？」

『オペレーション墨俣』すのまたの内情だ」

「鶴橋、貴様本気でそんなものが政府内部にあつたと信じてるのか？」

北条に真顔で問われると、鶴橋は一瞬、答えに詰まった。

「信じている。何故ならあの記事は俺が書いたからだ」

「なるほど、あの記事は貴様が書いたか。ならば、もっと突っ込んだ話をしてもいいな。

鶴橋、貴様はあの文書を、防衛省の職員から直接手渡された訳じゃないだろ？ もちろん防衛省に忍び込んで盗み出したものでも、ネットを通じて防衛省内部のサーバーから引き出したものでもない。おそらくは第三者から、こいつは防衛省の秘密文書だぜって

言って手渡されたんだ」

北条の真実を貫く言葉に、鶴橋は全身から血の気が引いていくのを感じた。

「別に答えなくてもいいぞ。俺は、貴様が真実を知っているか確認したかっただけなんだから」

北条はそう言いながら、シャンパングラスを傾けて唇を湿らせた。

「貴様がこの件を俺に問うたのは何故かと考える。すると見えてくることがある。それは、貴様自身も、アレが防衛省の内部にあつたと確信が持てていないということだ」

北条の心底を覗くような視線を浴びた鶴橋は、ただひたすら表情を硬くしていた。

「まあいい。この件では、貴様に答えられることは少なからう。他に、質問は？」

「ならば、尖閣現地の状況と、今後の展開についてだ」

「確かに心配になるよな。あの記事が事態悪化の引き金になったのは確かなんだ。下手すりゃ戦争だ。もちろんアレが、本当に防衛省の文書なら、政府の自業自得だと批判できるだろう。しかし、貴様はアレが防衛省のものではないと腹の底では確信してしまっ

ている。そう、今の状況の責任は、自分にあると自覚してるんだ」

鶴橋はこれにも応えることが出来ず、冷や汗でびっしょりとなっていた。

「なあ、教えてくれ、鶴橋。どうして記事を書く時に裏取りをしなかったんだ？ 貴様はそんないい加減な仕事をする人間じゃなかったらう？」

「……」

「貴様は新聞記者になる時、真実を追求するジャーナリストになるんだって胸を張ってたじゃないか。あの時の貴様は一体どこにいったんだ？」

「……」

何も答えられない鶴橋を見て、北条は深々と嘆息した。

「現在、尖閣の接続水域では、海上民兵の漁船百隻余りと海上保安庁が対峙している。今回は、中国海警と人民解放軍の東海艦隊がオマケとして付いてきている。日本政府も、海上保安庁、海上自衛隊に命令を出して、動ける艦艇のほとんどを沖縄周辺に集めた。文字通り一触即発の事態だ」

「い、いつ始まる？」

「そんなことは誰にも分からないさ。今この瞬間にも始まっているかもしれないし、明日かもしれない」

相手のあることは、いつだって思惑通りには進まないものだとな北条は語ったのである。

* * *

中華人民共和国／青島^{デジタオ}／人民解放軍総参謀三部第四局電網偵察処

通称『アニメ・スタジオ巨視』S I G I N T^{シギント}部に所属するアナリストのメイリンは、ヘッドホン越しに聞こえる会話に心臓が高鳴るのを感じた。すぐに報告しなければと上長の姿を捜す。

「徐主任^{じょ}！」

呼びかけても、主任はちょっと待てと手を振るばかり。

コンソールルーム内にいるそれぞれの担当者が、自分の任務、自分の監視対象者についての報告を勝手気ままに大声で話すので、メイリンの声も霞んでしまうのだ。

そこでメイリンは、コンソール脇のアイコンをクリックして、ボリュームを最大にした。

キーンというハウリングに続くスピーカーからの大音声に、コンソールルームはしん

と静まり返った。

『い、いつ始まる?』

『そんなことは誰にも分からないさ。今この瞬間にも始まっているかもしれないし、明日かもしれない』

徐がメイリンを振り返った。

「メイリン。君はイツロウを監視していたな。これは誰との会話だ?」

「会話の相手は、ホウジョウソウギのようです」

「日本政府の政務官の?」

コンソールルーム内が、アナリスト達の歓声でわつと沸き返った。

中南海から日本政府の監視を強化しろという要求があつたばかりだ。政府関係者との会話が傍聴できるのは、彼らの任務に大いに役立つ。しかも話題はまさに尖閣の問題だ。全員が息を凝らして会話に聞き入った。

「映像が欲しい。この場所にいる人物のスマートフォンで、裏口の開けられそうなものはあるか?」

他のアナリストが、スマホ内蔵のGPSで鶴橋の居所を特定。それと同じ緯度・経度に位置するスマホをたちまちリストアップした。

「残念ながら、ほとんどがリングゴ社製のように——」

「ちつ、日本人の奴め」

「あ、待ってください。この店の防犯カメラは、部品が磐華製です」

磐華とは、中国の電子部品メーカーだ。

「裏口を開けられるか見てくれ」

「了解——この年式なら、間違はなくバックドアが付いてます。ちよつと待ってください」

アナリストが、キーボードを叩いて製品別のマニュアルを呼び出し、それに記されている手順に基づいて店内防犯カメラにアクセスする。

「映像来ます」

コンソールルームの大スクリーンに店内の様子が映る。画面の中央で、鶴橋と北条の二人がテーブルを挟んで向かい合っていた。

「何か凄い店みたい」

「あの料理、美味しそう」

内装の豪華さや料理の皿を見て、女性アナリストの何人かが呟いた。アナリストなどという仕事をしていても、その実、政治や外交にはまったく無関心という者がここには

「少なくないのだ。」

「メインデッシユは魚みたい。一度食べてみたいけど、予約取るの大変なんですよね」

徐は嘆息しつつ、静かにしてくれと二人に求めた。

コンソールルーム内のモニターに映る北条は、何かに対して憫笑^{びんしょう}すると、メインデッシユの魚にフォークを付けていた。

『今回ばかりは、中国も本気だ。だが何故今なのかとみんな首を傾^{かし}げている。我々の分析では、まだ軍事行動に出られる状況が整ったとは言えないんだ。なのにそれでも討って出てくるのは、今動かなければならない理由が生まれたからだろう。……そこで問題になったのが、貴様の「オペレーション墨俣」だ。俺達はアレを、中国が難癖を付けるためにでっち上げた代物だと思い込んでいた。しかし今、お前の顔を見ていて違うかもしれないと思う当たった。アレを仕込んだのは、我が国と中国が衝突することを望んでいる第三国かもしれない』

通称『アニメ・スタジオ巨視』のアナリスト達は、モニター越しに見える北条と鶴橋の会話を聞いてどよめいた。

「まさか……」

アナリスト達が、一斉に徐を振り返る。

「Aチーム。カザミヤヒカルという人物の調査は進んだか？」

カザミヤヒカルは、鶴橋に『オペレーション墨俣』のデータを送った人物の弟であり、データを防衛省から持ち出してリークさせた張本人だ。

すると、Aチームのリーダーが困り顔で答えた。

「いえ……その、実は……」

「何だ、はっきり言え！」

「我々Aチームは、スマートフォンの通話履歴、クレジットカードの支払い記録、スマホ内部の画像データ、クラウドメールの通信履歴、住所録、更に日本国防衛省にある職員名簿、年金、健康保険の加入者リスト、給料の支払い記録もすっかりしていたので、このカザミヤヒカルという人物は間違いなく実在すると断定しました。したのですが……」

「それがどうした。はっきり答えろ！」

「ところが、調査を進めると、カザミヤヒカルの記録には、防衛省に採用されてからの十二年間で一度も残業手当の支払い記録がないと分かりました」

「何だ?!」

「レセプト請求の記録ありません」

別の女性アナリストが補足した。

「レセプト？ それは何だ？」

「日本の医療保険制度では、病院を受診した者は、かかった医療費総額のうち三割を窓口で支払います。残りの七割は、病院がレセプトという請求書を保険組合に送って支払いを受けるのです。しかしカザミヤヒカルという人物のためにそれを支払ったという記録が見当たりません。つまり、この男は、十二年間風邪にかかったこともなければ、歯医者にかかったこともないのです」

徐はガツーンと頭を叩かれた気がした。

どんな人間も、十年単位で見れば一度は医師にかかるものだ。風邪を引いたことがないとしても虫歯にはなる。更に言えば、一度も残業をしたことがない日本人が、ましてや国家公務員がいるはずがないのだ。

「つまり、カザミヤヒカルという男は存在しない訳か」

当然、そんな人間から提供された内部文書が、本物であるはずもない。

皆の脳裏に過りながら、誰もが口にするのを避けた言葉をメイリンが代弁した。

「ルアー・フィッシングに引っかけたんですか？」

ルアー・フィッシングとは、これ見よがしに大切に扱っておいた偽情報を盗ませる諜報活動上の口口だ。

当然、徐達も気を付けてはいる。しかし仮想敵のコンピュータのハードディスクやメモリを情報源にしている限り、どうしたって防ぎ得ないリスクでもあるのだ。

「このことを直ちに中南海に報告しろ！ それとBチーム、文書のファイルの検証はどうなってる？ 今すぐやめさせろ！」

「えっ!? 文書ファイルを調べていたら、一部に圧縮されたデータ領域があると分かり、今解凍しようとしてるところですよ」

「ま、待て、危険だ！ 止める！」

徐はBチームの方角を振り返って叫ぶ。

だが、遅かった。

突如としてコンソールルーム内のBチームの端末画面が真っ青になった。コンピュータを所有している者なら一度は見たことがあるだろう、絶望のブルー画面だ。しかもその現象は、Bチームを越えてフロア全ての端末画面にまで広がっていった。

「しまった！ ウイルスだ」

警報音が鳴り響き、メインのモニターまで真っ青になる。

「どうして!? あのデータはすっかり隔離しておいたはずなのに!」

「すぐにメインスイッチを切れ!」

「だ、ダメです。反応しません」

「電源ケーブルをひっこ抜け!」

アナリスト達は、電源を引き抜いて問題の広がり止めようとした。しかしそれも上手くいっている様子はない。既に全てのマシンに影響が及んでしまっているのだ。

いくつかのマシンからは火花が散り、コンソールに向かっていたアナリストが悲鳴を上げた。

「大変です!」

「一体何が起きてる。報告しろ!」

「バックドアを開くソースコードが次々と……くそっ! 勝手にデータが抜き取られていきます。日本人にしてやられました」

「こんなこと日本人に出来る訳ないだろう!」

「じゃあ誰なんです?」

「アメリカに決まってる!」

徐は屈辱に齒噛みしながら、部下の考え違いを正した。

「剛総参謀長!」

東シナ海の現場から送られてくる映像を食い入るように見入っていた剛に、葉補佐官が呼びかけた。

「どうした?」

「『アニメ・スタジオ巨視』の徐主任から報告が入りました。『オペレーション墨俣』はアメリカの仕込み工作である可能性が高いそうです」

「何だ?!」

「アナリストのチーフである徐は間違いないと断言しています。日本に尖閣を要塞化する意志がなかったと分かったのなら、作戦中止を国家主席に進言なさるべきかと」

すると魏海軍中将は言った。

「ダメだ! 今更作戦中止など不要である。やれば大きな地歩を得られるというのに、どうして途中でやめる必要があるのか?」

すると葉は反駁する。

「しかしこれは我々が自ら望んで得た好機ではありません。たまたま一局面で優勢に見えるからと安易に進んでは、真の敵であるアメリカの仕掛ける泥沼に引きずり込まれて

しまいます。魏海軍司令官、時期がまだ早過ぎるのです。ここで事を起こしたら、事態の收拾にどれほどの手間が掛かるでしょうか？」

「しかし日本を屈服させる好機なんだぞ！」

「いいえ、違います。逆に日本をいよいよ本気にさせ、我が道が閉ざされる危機なのです！」

「日本が力で来るというのなら、こちらで力に対抗すればいいではないか!？」

「しかし、アメリカに介入の口実を与えてしまします。そうなれば、我が国も少なからず傷を負います」

「たとえそうだとしても、今ここで退いたら我が国内が収まらない！ 少なくとも、私は海軍の部下達を抑える自信はないぞ！ ましてや党の年寄り達を黙らせることなど不可能だ。党が、国内が割れるぞ。それでいいのか？」

魏中將は苛立った声で怒鳴った。

臺徳愁は、中国の最高権力者である。しかし何もかもが彼の思い通りになる訳ではない。

戦前の日本においても、軍部が好き勝手に独走し、昭和天皇の意に反した行動を起こしたように、中国の権力体制もまた複雑で彼の思いのままにはなっていない。実際、そ

の証左のごとく彼は何度も暗殺未遂を受けている。

「いずれにせよ、海軍は主席からの中止命令がない限り作戦を続ける」

では、そんな状況で臺主席はどうやって権力を維持しているのか。

それは利益の分配でなり立っている。世界第二位となった中国の経済力は、今や圧倒的だ。しかしそれでも配分される利益はピラミッド型の支配層末端にまでは行き渡らない。そのため臺主席はその不足分を、将来への期待という約束手形を切ることで賄っている。

将来の厚遇が約束された者や分配される富を待っている者にとつて、成功と勝利は当たり前のものであり、失敗や停滞は党上層部、指導者層の弱腰や能力の低さに起因すると見る。そうなると別の者を、自分に利益を与えてくれる者を、トップに据えようという動きが生まれてしまう。

だからこそ国家主席の臺といえども、慎重論に傾くことは難しく、海軍の、そして魏中將の主戦論を掣肘できない。日本に勝利することは、言わば海軍に投げ与える利益でありエサなのだ。

「総参謀長……」

葉はもう一度剛総参謀長に決断を促した。臺主席に作戦中止の進言をすべきだ、と。

「もうやめろ、葉補佐官！ 君の言いたいことは分かるが、総参謀長はこの作戦を最後までお見届けになると仰っている」
 魏海軍中將の言葉を前に、剛総参謀長は沈黙してしまった。そうなれば、葉補佐官もまたそれ以上の慎重論を主張できなくなってしまうのである。

09

海上自衛隊／第四護衛隊群護衛艦『かが』――

F I C (旗艦用司令部作戦室)

『かが』司令部作戦室モニターに映し出される東シナ海の状況図に変化が現れた。

『中国海上民兵団が、接続水域に入りました』

接続水域に現れるまで、海上民兵を乗せた漁船は、ある程度まとまった船団を作っているだけだった。しかし接続水域に入る手前で一旦停止すると、一カ所に集合して舷を

接した塊を作った。

概ね楔形に整えられたその集まりを見れば、意図は分かる。隙間のない巨大な一塊となつて前進し、針路を阻む海上保安庁の船団を突き破るつもりなのだ。

『海上保安庁の船団が、対処に向けて前進開始』

もちろん海上保安庁は、船をぶつけてでもこれを防ぐとする。

しかし問題は、中国の漁船が鋼鉄で作られていることだ。これで正面からぶつかられたら、多少では済まない被害が出るだろう。

実際、南シナ海ではベトナムやフィリピンの木製やFRP製の漁船が、中国漁船の体当たりで沈められている。マスコミで報じられるのは実際に起こっていることのごく一部だろうから、もっと多くの船が海賊行為に等しい襲撃の犠牲となっているはずなのだ。

「いよいよか……」

東都博海将はそう呟くと、姿勢を正して部下に東京への回線を繋ぐよう告げた。すると待ち構えていたのだろう。首相官邸の高垣がモニターに現れた。

『ご報告いたします、総理。『状況』が開始されました』

状況――主に演習などの訓練の際に使う「設定」を示す言葉であり、実戦では使わないと様々な場面で語られてきた。しかし、こうして実際に有事になってみると、案外

使ってしまうのだなと東都は内心で苦笑した。人間は、本番の時こそ訓練のままに思考、発言、行動してしまうのだ。だからこそ訓練は本番のごとく振る舞わねばならないのである。

「では、計画通りに対処してください」

高垣が総理大臣として命令を伝えてきた。

「了解しました」

いよいよ制服組の出番だ。東都は部下達を振り返って告げた。

「では、始めよう。『チア号作戦』を開始せよ」

「了解！」

『三回裏だ。チアド○ダンスを開始せよ』。繰り返す『三回裏だ。チアド○ダンスを開始せよ』

一斉に作戦開始の符丁^{ふちよう}が発信される。モニター上の輝点が一斉に移動を開始し、『かが』のFICは俄然活気付いていった。

東都はふと疑問に思ったのか、左右の幕僚に問いかけた。

『どうして『チアド○ダンス』なんだ？』

「あ、自分がド○ゴンズのファンだからです」

幕僚の一人——名古屋出身——が片手を挙げる。

「あ、そう」

ここで新たに『ド○ゴンズのファンだと、どうしてチアド○なのだ』という疑問が東都の中に生まれたが、これを問うと更に不毛な会話が続きそうで納得するしかなかったのである。

『三回裏だ。チアド○ダンスを開始せよ』

超音波を搬送波に用いた水中電話で作戦開始を伝えられたそうりゅう型潜水艦『りゅうじょう』と『ひりゅう』の二隻は、尖閣諸島内の浅海に沈座した状態からゆっくりと浮上を開始した。

予定の潜度まで静かに浮き上がる。

「魚雷管、注水終わり」

発令所の中央後方に居座る艦長には、部下から次々と報告が届けられてきた。

「前扉開け」

「発射用意よし！」

ふと、艦長が我に返ったような表情をして振り返った。

「ところで、本当に発射して大丈夫なのか？ 水圧が急激にかかって彼女達に、健康被害とか……」

「大丈夫です。特地に派遣されている黒川一佐から、何度も実際に試して問題なかったとの報告が入ってます。潜水医学の専門家も太鼓判を押してます。大丈夫です」

近年、潜水艦に乗り込むようになった女性士官の一人が心配は不要だと告げた。

「そうか。ではそれを信じて実施しよう——チア号作戦はじめ！」

「チアガール射出！」

「前略、中略、ファイヤー！」

艦内に圧搾空気の流れる音が響く。

「行くよ——」

これによって二隻の潜水艦全ての魚雷管に装填されていた半身半魚の人魚達——特地から招聘したケミィ達アクアスが、東シナ海へと飛び出していったのである。

* * *

「ふむ——」



北条はテーブルに置いたスマホ画面にチラリと視線を走らせた。官邸から「状況」が始まったという連絡が入ったのだ。

だが、北条の役目は既に終わっている。もう事態の進行を黙って見守るくらいしかすべきことはない。そのため彼は席を立つことなく、鶴橋との会話を続けた。

「さて、貴様が心配している今後のことだ。相手があることとはいえ、今後の展開についてはある程度の予測は付いている。それについての解説が必要か？」

「国と国の諍^{いさか}いはカードゲームに似ていると理解しているが――面倒でなかったら説明してくれ」

鶴橋がぶっちゃけた解釈を口にするのと、北条は笑いながら頷いた。

「カードゲームとは言い得て妙だな、実際その通りだ。外交交渉――その延長としての実力行使も含めて、トランプゲームの『大富豪（大貧民）』に例えると理解がしやすい」北条はまずルールの確認から始めた。

大富豪とは、四種類のスート五十二枚にジョーカー一枚を加えて参加プレイヤー達に均等に配布し、場に一人ずつカードを捨てていき、手札が最初になくなった者が勝者として上がれるというゲームだ。

ただし、場に捨てるのが出来るのはシーケンス冒頭に出されたカードより優位な

カードのみ。

カードは正常時だと『2』がもつとも優位にある。つまり強い順に2、A、K……以下暫時数値が減っていき、最劣位が『3』だ。特定のカードを集めた者が『革命』と称して提示するとこれが逆転することもある。

さて、カードの捨て方だが……

そのシーケンスで最初にカードを捨てる者が、その後の流れに縛りをかけることが出来る。

縛りには『単独一枚』。あるいは『同じ数字のペア、スリーカード、フォーカードという組み合わせ』または『同じマークの連番^{ベイト}で三枚、四枚という組み合わせ』が考えられる。

続くプレイヤーは、その縛りの範囲で、先に出されたカードに優越するカードを出すことが出来る場合に限って、カードを捨てられるのだ。

もし、場に出されたカードよりも強い手札を出す者がいなければ、積み上げられたカードの山は流されて、そのシーケンスは終了する。そして次のシーケンスは、前シーケンスで最後にカードを出していた者から始まるのだ。

——このゲームで得られる教訓は、相手が出してきたカードに合わせて対応しては主導権は得られないし、勝利も掴み得ないということである。場に捨てるカードの数値が漸次エスカレートしていくという流れを断ち切り、相手に次のカードを出すことを躊躇^{ためら}わせなければならぬ。そして次のシーケンス、更に次の次のシーケンスで主導権を掴み続けるのだ。

そのためには、優れたカードを揃^{そろ}えることが肝要となる。しかしそれと同じく大切なのは戦術だ。

『公船の接続水域への滞在』『領海侵入と長期滞在』『日本の民間漁船を追跡』『日本が領海と主張する海域で、漁船を操業させ、あえて海上警察が取り締まる』というのは劣位カードを一枚ずつ切っていくようなもの。

そこで北条は鶴橋に問いかけた。

「だとしたら、我が国の打てる手は何だと思う？」

「海上保安庁を出す、の次なら、自衛隊艦隊を出すことだろ？」

「それは相手が出してきた『6』のカードに対して『7』を、『8』のカードに対して『9』を切っていくようなものだ。主導権を奪うには、相手の出したカードの数段上位の、しかも相手の意表を突くようなカードを切っていかなければならない」

「それは一体どんなカードなんだ？」

すると北条はニヤリと微笑んで言った。

「それは、こいつだ」

* * *

「運転用意！ はじめ！」

狭い艦内にすし詰めに並んだ水陸両用戦闘車AAV7のエンジン音が一斉に鳴り響き、ディーゼル^{ディーゼル}の排煙が瞬く間に車両甲板内に充満していった。

「各車、建制順にウエルドックまで前進せよ」

水陸機動団第一連隊上陸隊の要員達を満載したAAV7は、海上自衛隊輸送艦『しもきた』の艦内で後部へと進み始めた。

ほぼ同時に『しもきた』後部のハッチ、スターンゲートが開いてウエルドック内は海水で満たされていく。

ハッチが完全に開いて見えてきた東シナ海は、青空がごとく蒼く透き通っていた。

第一連隊上陸隊第四中隊長は、これから進み出ることになる海面の波がやや高いもの

の、A A Vの許容範囲であることを目視で確認した。

通常「連隊」は、実際に作戦行動をする際に、機甲や特科といった様々な職種の部隊をその隷下（れいか）に置いて「戦闘団」となる。しかし水陸機動団ではまったく違っていた。戦闘できる編成を完結させた彼らは「連隊上陸隊」と呼称されるのだ。

「リクエスト・グリーンウエル、フォウ・デパーチャー！」

中隊長が無線機を通じて『しもきた』の管制に呼びかける。すると『しもきた』艦長からのGOサインが出たことを報せるグリーンランプがウエルドック内に灯った。

すると同時に、ウエルドック後方のキャットウォークにいる海自管制員が、赤の棒を引っ込めて緑の棒を振る。

A A V 7は誘導されながら一両ずつ前進を開始。スターンゲートから海へと飛び込んでいった。

*

*

人民解放軍海軍航空母艦『山東』

（さんとう）

『山東』の艦隊中央指揮所では、作戦司令員の趙支仲（ちうしちゆう）中将と、今次作戦に参加する海・空人民解放軍司令員と参謀、そして政治委員達がテーブルを囲み、状況の推移を見守っていた。

『日本側海上保安庁の船団が突如、散開しました！ 海上民兵の漁船団と衝突せず、素通りさせてます！』

モニターには、突如として左右に分かれていく日本国海上保安庁所属の巡視船団の姿が映し出された。

「何だって!」

「どういうことだ」

どよめく参謀と政治委員達。

そこに更に驚くような報告がもたらされた。

『『くにさき』『しもきた』『おおすみ』の三隻から、水陸両用車が出ています!』

「映像は入るか!」

「少しお待ちください。入りました!」

すぐに上空のドローンから映像が入った。それによって報告が間違っても何でもないことが理解できた。

**立ち読みサンプル
はここまで**

「どうなってるんだ？」

「日本人は何を考えている!？」

人民解放軍側は、この段階でこんなことになるとは想定していなかったのである。

当初の予想では、海上民兵が島に上陸しようとするのを、日本の海上保安庁が妨害してくるはずであった。

そこで人民解放軍は、自国民の保護を理由に海警を出し、海上保安庁の船の針路に立ち塞がらせる。そうして正面から睨み合いをしている間に、海上民兵達が上陸するという段取りだった。そこで中華人民共和国政府は、日本に対して外交交渉を要求するのだ。もちろん、日本国内、政府内にいる親中国派の政治家、著名人、マスコミを総動員して「戦うべきではない」「争いは避けて話し合え」と盛大に宣伝し、圧力もかける予定であった。

もし、ここで日本側が話し合いに応じるなら、海上民兵は島に滞在する時間を稼ぐことが出来る。状況によっては、補給や物資の搬入などを行い、恒久的な実効支配を目指すことも可能となるはずであった。

もしも日本政府が話し合いを拒否し、海上自衛隊を前面に押し出してくるなら、人民解放軍も東海艦隊を前進させて正面对峙する――

戦火はギリギリまで交えない。常に、日本が事態をエスカレートさせたのだという言い訳でごり押ししていく。そうすれば、米軍も介入できないはずなのだ。

しかし、である。

海上保安庁は漁船団の針路から立ち退いて漁船団を素通りさせた。まるで島に上陸してくださいと言わんばかりだ。これでは海上警察が介入する口実にならないし、攻撃する理由にもならない。シナリオはのっけから狂い始めたのである。

すると政治委員の丁玉愛^{ていぎょあい}が厳しく言い放った。

「いや、何を躊躇う必要がある！ 日本軍が魚釣島に上陸しようとしているではないか!? これは我が国の領土への明確な武力侵攻と言えるはずだ！」

「そ、そうです、司令員。直ちに攻撃すべきです！」

参謀や政治委員達は口々に言った。

「いや、しかし……」

だが、趙支仲司令員は彼らの意見には頷けなかった。

それでは、外交交渉の次元をすっ飛ばしていきなり武力行使の段階に踏み入ってしまうからだ。

もしここで攻撃をしたら、最初に発砲したのは中国側ということになってしまう。